第７次山形県教育振興計画検討委員会（第８回）　発言概要

（第７次山形県教育振興計画検討委員会 委員名簿順）

【池田委員】

○　これまでの議論で自由に発言してきたが、発言の一言一言の意図を組んだ上で計画に落とし込まれていると感じた。

○　七教振では数多く議論を重ね、様々な発言を聞いたり、意見を集約するということができたのはすごいこと。前回の六教振よりも大幅にボリュームがアップしたと感じているが、取りまとめのおかげでとても整理されてわかりやすくなっている。

○　「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」という目標を定めていて、計画ではそれぞれのアクションの指標を提示しているが、そもそもの目標を達成したかどうかの指標がないと感じた。

○　ウェルビーイングというのであれば、幸せかどうか、幸せを感じる人が増えているかどうかという指標があってもいいのではないか。その上で、四つのチャレンジに関して、「ワクワクしていますか？」、「何かに挑戦していますか？」などのシンプルな質問を入れていくのはどうか。

○　体育やスポーツで育まれたものを指標にしてもらいと考えていたので、順位に関する指標がなくなってよかったと感じている。国体での順位やインターハイでの入賞数など、順位を取ることはもちろん大切だが、体育やスポーツを通してどれだけ自分が成長したかということを感じてもらえることが一番大切。

○　これから新たな指標を設定していくことがあると思うが、その時も様々な方の意見を取り入れてもらいたい。

○　今回の計画をホームページ上に載せる時に、一部を英語にすることによって、中高生等の学びにつながり、学びから計画に興味関心を持ってもらえるのではないか。さらには、英語にした計画が海外の人たちにも伝わり、山形への興味関心につながる等、学びと発信がつながっていくことになるのではないか。

【石沢委員】

○　県としての重大な方向性の中に「ワクワク」とか「みんな笑顔で」のような言葉が入り、私たち関わっている人間が楽しみながら、どうすれば子どもたちや山形県の将来のことをみんなで一緒に考えていけるのかという、これまで紡いできた思いがきちんと計画として形になっていて素晴らしい。

○　アクション５「生涯にわたり学びやスポーツ・文化芸術活動を楽しむ」の部分で、大人になってからも生涯学び続ける、いろいろな世代の人と関わりながら体験的にいろいろなものを学んでいくということを示したことによって、

様々な世代の人が幅広く学びを考えられる内容になっていると思う。

○　今後の計画の推進について、現場の先生や地域の皆さんは、計画の内容をみるだけでは、何をすればいいのか困ることがあると思う。７教振をもとに、実績のある取組やこれからの取組について、先生・地域の中で議論や共有が起こる等、７教振がハブとなり、それぞれの取組みに伴走していく役割となってほしい。

○　７教振に関わることや、７教振を受けてやってみたことを他者に向けて話し共有することによって、先生方や地域の皆さんが７教振を自分ごとにできると思う。今後は７トークの様な話し合いの機会をたくさん作っていけたらいいのではないか。

○　情報の発信と集約は、県民に広く知ってもらい関わりを生み出していく意味でとても重要になると思うが、必要性をあまり理解しないまま、しなければならないということに迫られ、情報発信していることが多いのではないかと思う。発信の目的や対象、手法などが曖昧なままだと、ただ発信するだけになってしまう。

○　今後十年で、様々な学校が自校の特色や生徒の日常を発信していくことが当たり前になってくると思うが、情報発信をなぜする必要があるのかといった根本的な部分について、先生方の研修の機会などがあると、役に立つのではないか。

【佐藤委員】

○　今回の教育振興計画案は、細部の細かいところの整合性や施策との関連、そして何よりも分かりやすさとか見やすさというところにも非常に配慮が行き届いた最終盤にふさわしいものを作っていただいた。

○　ウェルビーイングというキーワードにこれまで山形が培ってきた引き継ぐべき教育の伝統があり、六教振からの継続性もありつつ、さらにはこれからの十年の変化を踏まえた委員の先生方の意見を肉付けしていきながら、一つの形として結実した計画ができたのではないか。

○　これから、この計画がどのように活用されていくかということが何よりも重要。そのために広報や周知が要になっていくと思うが、地域の方々に対して７教振の振興計画を説明や共有する機会が多数設けられていると伺ったので、非常に安心した。

○　一番大事なのは、山形の子どもたち、そして学校、家庭、地域がどんな風にこの十年で変化を遂げていくかということ。１、２年で大きくは変わらないかもしれないがウェルビーイングを真ん中に置いた本計画を土台にして、山形の教育、学校、子ども、大人、みんなが生き生きとウェルビーイングであって欲しい。

○　子どもたちの主観的な指標に関して、タブレットを活用して小学校１年生から高校生まで回答ができる統一の項目を５項目あるいは１０項目ぐらいを

厳選して設定することにより、指標として説得力を持つものになるのではないか。

【末永委員】

○　これから計画を実行・運用していくフェーズに入るが、学校現場・保護者・企業の中で７教振について議論が起こり、それがアクションに落ちていき、現実が少しずつ変容していくことが大切と考えている。

○　産業高校で産業界と教育を結びつけるコーディネーターを３か月間務めたが、先生方の多忙を肌で感じた。議論を起こしていくには、地域・企業の方が学校現場に入っていき、一緒に議論をし、実務を巻き取っていくことが必要だと思う。

○　地域のトーク会を開催しているが、例えば、その中で定期的に７教振の話題を出し、議論が生まれ、先生方に負担をかけずにアクションを学校現場に持ち込むといった、企業・地域のバックアップが運用にとっては大事だと思う。

【高井委員】

○　アクションの項目が多岐にわたっているが、まとまり・方向性があり、それぞれが相互に高めあう計画になっていると思う。

○　この計画の中では、社会との連携や企業の参加が大きな肝と思っている。教育は１８才・２２才で完結するものではなく、そこから連続性のある人生を送るという中で、児童生徒と教員だけという環境で育ち、社会に出るといったところに大きなギャップを感じていた。計画はそこをつなぐ形となっていて素晴らしい。

○　企業としても、学校でどのような教育がされてきたかみえず、教育関係とのつながりがなく、企業と学生の意識の差が開いている状況だと思う。そこに接点を作り、相互理解が進むことによって、企業・学生の双方にメリットが生まれると思う。

○　企業等の参加にあたっては、参加によって社会的課題を解決しつつ自分たちのビジネスに成長をもたらし、子どもたちの理解につながるといった、メリットや目的が見えることが大事だと思う。そのためには、仕掛け方や施策が重要になる。

○　指標について、連続性のある指標は大切だが、社会の変化に応じて、柔軟に対応していくことも必要であるため、指標に縛られすぎず、本質的に必要な数値をとっていくことが大事だと思う。

○　ユーチューブのコメント機能等、県民の考えをキャッチできるような仕組みが必要だと思う。

○　DX についてはスピード感を持ってやっていかなければならず、正解や完成がないと思うので、慎重になりすぎずトライアンドエラーをしてほしい。

○　子どもの心理的安全性を第一に考えることが、チャレンジにつながると思

う。子どもスタートを常に忘れずに取り組んでいただきたい。

【玉井委員】

○　計画について、今後１０年の指標となる内容にまとまっていると思う。

○　山形県に６年間住んでいて、山形県のポテンシャルは高いのだが、なぜもっと活かせないのかという思いがずっとあった。恐らくその理由の 1 つは、教育なんだろうと思う。検討委員会は、そのポテンシャルをどうやって引き出していくのかを考える良い機会になったと思う。

○　指標として数値目標が置かれているが、数値に縛られることなく、数値が独り歩きすることなく、子ども達のポテンシャルを引き上げるように施策に取り組んでほしい。

【寺脇委員】

○　ICT は生活に組み込まれており、呼吸をするように使うものになりつつある中、ICT 環境整備が全てのベースにあるもの、ウェルビーイングのベースにあるものだと明示いただいたことに、本当にお礼を申し上げたい。

○　指標にある、「教育データの可視化のシステムを活用した県立学校の割合」は粒度が問題になってくると思う。割合ということなので、薄くやっても、深く突き詰めても、やったということになる。

○　教育データの可視化のシステムの活用とは、ラーニングアナリティクスによって、教員が児童生徒の学習を見る際の解像度を上げていくということだと思う。

○　具体的に言うと、英語の授業において、学習活動と読む速度や語彙力等の関係を分析できれば、授業のどんな活動に問題があり、どういった所でアドバイスすればいいのかということが見えてくる。そういった学習活動とデータをクロスして分析することをラーニングアナリティクスという。

○　最終的には、こういった教員が見る解像度を上げていくなような活動が、全ての県立学校で出来ると大変素晴らしいと思う。

○　ラーニングアナリティクスというと、とても難しいものと思われるが、出席の状況や保健室の利用状況をみて、不登校を予測したりといった、身近なデータを見ていくことからでも可能となる。肩肘を張らない形で推進していくことがよい。

【内藤委員】

○　計画については、まとまっており付け足しや指摘することはない。

○　私は駆け出しの経営者であり、千葉から来たものであるが、この検討委員会で意見させて頂いたことを、光栄であり胸をはれることだと思っており、この様な想いを県民のみなさん１人１人に味わっていただきたいと考えている。「計画にある施策については県民のみなさんと一緒に取り組んでいきます」

と、意思表示してスタートできたならば、きっといい変化につながっていくのではないかと思う。

○　計画の周知や推進について、SNS の活用は大事だと思うが、SNS だけでは手薄だなという不安感がある。今後、シンポジウムだったり、ワークショップを実施するとのことだが、そのためにもポータルサイトのような情報を集約する場所が必要だと思う。

○　県のホームページにも教育関連のページがあるが、今回の計画の中身とイメージが一致しない。ワクワク感等を示すのであれば、しっかりとしたポータルサイトを作成した方がいい。その上で、ＳＮＳやユーチューブ等が活きてくるのではないかと思う。

○　参考に岐阜県の環境学習のポータルサイトを紹介する。このサイトには、様々な情報が集約されていて、子ども向けのコンテンツも用意されており、学校の授業でも活用されているとのことであった。

○　このような形の、情報集約・発信の基地局となるものがあれば、計画の周知・推進が加速していくのではないかと思う。

【中西委員】

○　７教振策定にあたっては、企業の代表や親として、山形と県外の２拠点を行き来している視点も交えて意見してきた。未来を担う子どもたちにはこうなってほしい、大人になった時にはこんな人になってほしいということについて熱量を込めて議論ができたと思う。詰め込んだ感はあるが、ウェルビーイングという方向性を示し、何が大事なのかをしっかりと落とし込み、ワクワクを感じる計画案にまとまったと思う。

○　当初からグローバルな観点について意見してきた。弊社にはネパール出身で、子どもを地域の学校に入学させた社員がいる。入学した学校は、それまで外国出身の子どもを受け入れた実績がなく対応に苦労したと思うが、子どもたちはすぐに慣れて、在籍していた子どもたちにとってもとても良い体験となり、新しい風が吹いたと聞いている。学校現場の大変さは想像できるが、これからは避けて通れないことであり、山形だからこそチャレンジしてほしい。大変さを乗り越え、先生方の視点がワクワクの方向に向かう余裕が生まれることを望む。

○　アクション８の指標㊸にパートナーシップ推進事業への登録企業等の数があるが、企業と学校が、双方向にアプローチしながら、お互いが頼れる関係を築けるよう運用の中でしっかりと取り組みが出来ればと思う。

○　７教振の議論をスタートした頃に比べて「ウェルビーイング」という言葉が世の中に浸透してきた。このように世の中の変化が目まぐるしい中で、７教振が目指す姿は、10 年後ではなく５年後に目指す姿としてふさわしくなるかもしれない。変化に柔軟に対応できる体制で運用していただくことを期待する。

【藤川委員】

○　第１回検討委員会で、従来の行政的な会議でクリエイティブな教育が生まれるのかと提起した。７カフェの開催をはじめ、今回の策定の過程こそがイノベーションだと思う。イノベーションを起こそうという人がいて、それを受け入れる人がいて初めて持続可能以上のものが生まれる。具体的に描かれたアクションを実現できるかはこれからの取組み次第。この熱量を維持できるとよい。

○　教員にも意思があると感じる人、そうでない人がいると肌で感じている。意志ある人が数年で異動する仕組みはナンセンス。そうした点においても、これまでになかった改革を山形でできると面白い。

○　2015 年にサステナブルということが言われて 2030 年までの目標が示されているが、すでに、持続可能ではなく、リジェネラティブ（再生させる）と言われ始めている。持続可能を目指しても世の中が終わることは見えてきていて、どう再生していくかにシフトしないと、持続可能すらありえないというのがスタンダード。そうしたことを踏まえて柔軟に対応していくとよい。

○　現在、遊佐ではアジアやアフリカから若手を呼び込もうとしている。まずは、20 代の大人からだが、今後、中学生や高校生を受け入れていきたい。都市部からの地域留学ではなくて、海外からの地域留学を受け入れていく中でネックになるのが高校の一般入試。オンラインにするなど、意思や熱量のある海外の人材を地域で受け入れたいとなった時、本県が公立高校として一番初めに柔軟に対応できるよう検討してもらいたい。

○　７教振の策定過程は、スタンダードを壊した。今後も、教育からいろんなスタンダードを壊すようなことが生まれると嬉しく思う。

【三浦委員長】

○　事務事業評価の中に明確な指標を設定して、事業の達成度、目標の達成度を見ていくというところに我々も慣れつつある。７教振はそれをさらに充実させる一つの新たなスタート台になるのではないか。

○　今回の検討委員会で、教育振興計画を広めていくためにはとにかく関わりや参加を生み出していく場が必要だということを改めて強く感じた。今後、県民が関わり参加できるものを作ることが必要。

○　計画は、ウェルビーイング、子どもたちや私たち一人一人の幸福感を目標に掲げているので、それをどこかでみんなで測ってみることがあってもいい。

○　内藤委員から岐阜県の例を出してもらったが、ホームページ上で今の自分のウェルビーイング度を計るようなところがあり、毎日山形県のウェルビーイング度が上がり下がりするような何か仕組みがあると県民の人たちも見てくれるのではないか。

【村山委員】

○　各委員の刺激的で前向きな発言に触発され、昨年４月から週１回、東根市の小学校でこころの相談員をしている。ウェルビーイングという非常に大きな目標のもとで前向きにチャレンジするためには、子どもにとっても大人にとっても、安心安全できる環境が一番大事だと感じている。私自身も一県民として、子どもたちが安心できる地域の中で、試行錯誤を繰り返しながら経験値を積み、豊かな育ちをするための学びが得られる環境づくりに挑戦していきたい。

○　アクション４の指標㉗「困りごとや不安があるときに先生や学校にいる大人にいつでも相談できると思う児童生徒の割合」について。相談員として子どもたちと話す中で、親に心配をかけたくないので心のモヤモヤや苦しみを親には話したくないという子が少なくないと感じている。現状値の約 66％も悪くない数字だとは思うが、この指標がもっと上がるとよい。子どもが、本当の心の声を、学校にいる先生、保健の先生でもいいし、第３の大人として私のような外部の相談員でもいいので、話せる機会が増えることを願う。

○　研修会の機会を通じて７教振を推進していくことは当然大事。加えて、自分も関わるボランティアや家庭教育の研修の際に行うアンケートなどに、「子どもの試行錯誤を見守り、挑戦できる環境を作っているか」といった内容を盛り込むことも、計画を推進するための一つの策になると思う。

【小関教育委員】

○　取組みの成果を検証するにあたり、指標を置いた点は良いが、数字の変動のみを表面的に捉えないようにすべき。目標と目的をすれ違わせないようにしなければならない。一例として、残業時間を縮減して 80 時間以内にしようと取り組む中で、減少したからよかったという単純な判断は違う。残業時間の縮減によって、心身の健康を取り戻すという目的が達成できたかどうかを見なければならない。

○　加えて子どもたちが生き生きとワクワクできたかという点を忘れてはならない。取り組んだ結果、子どもたちが元気で、いい子どもたちが育ったと思えることが目的だと思うので、その点を忘れないでほしい。

【工藤教育委員】

○　今後 10 年の計画なので、これをどう活用していくかが重要。県民一人ひとりに当事者意識を持ってもらう必要があるので、今後は、この計画をどう県民に伝え、行動してもらうかに注力していかなければならない。

○　目標と目的が一緒になってしまいがちなので常に意識する必要がある。目的としては、一人ひとりのウェルビーイングが大事。目標値を設定するにあたり、時代が変われば設定した目標値を変える必要が生じる場合もあると思うので柔軟に見定めて行動していくべき。

【和田教育委員】

○　７教振は誰に向けたものか。全ての方が、自分事としてとらえていくことが最も重要で、その点こそが７教振の実現につながる最も重要な要素だと思う。理想は理想として掲げながら、いかに理想に近づけるか。

○　まずは現実を知ることが重要。この７教振の内容が広く皆さんに周知されるとよい。山形で伝統産業を行っている一人として、山形に住んでいる皆さんが、山形の資源を知り、魅力を知った上で、それを外に発信していくことが大事なことの一つ。

○　本県の外にいる方の方が山形の良さに気づくことが多い。山形を知ることで子どもたちがそれを自分事としてとらえ、成長の過程で、さらに山形をよくしていってくれるような教育に繋がることを願う。

○　県内では、県立高校の志願者が減少し、私立高校を志望する学生が増えている。一因として、受検時期が早いことや、各学校の制度や学校のアピールの仕方が上手なことがある。受検に際しての親のストレス、体調管理のストレスを減らすという観点などからも、オンライン受検は今後必要になるのではないか。

【丹治教育委員】

○　先行きが不透明なときだからこそ必要な、そして大切なことが詰まった計画になった。子どもたちや大人が、そうした時代を生きていく力のもとになるものだと思う。大事にして取り組んでいきたい。

○　５年後、10 年後を見据えた計画なので、目の前のことだけではなく、少し先を見据えて取り組むことが大事。

○　子どもも大人も、みんな一緒にワクワクしながらチャレンジしていけるとよい。大人になると、職業や立場などにとらわれがちだが、自分を含め、県民の一人として、まずはやってみようという気持ちを持って取組みたい。

【手塚教育委員】

○　素晴らしく、ワクワクできる計画になった。この指針を今後 10 年間強力に推進していくことが重要。今後発足する推進委員会で、具体的な評価等をしながら推進してもらいたい。

○　アクション１から３の指標には主観的な指標を含んでいる。設定した趣旨や施策の進め方を含め、具体的な進捗やフィードバックをしながら具体的な取組みに落とし込んでいくことが今後重要。